

明治の歩みを
つなぐ、つたえる



平成30年は、明治改元が布告された明治元年（1868）から数えて満150年に当たります。明治期は、近代化への取組みとともに、現代の日本の基本的な形を築き上げてきた時代です。特に近代国家建設に向けた立憲政治の確立は重要な施策の一つでした。そこで、明治150年を機に、その意義や歴史を学び、立憲政治の確立等に貢献した先人の業績を次世代に

遺そうという取組みが全国各地で進められています。長い歴史をもつ大磯町においても、明治期は特別な時代です。江戸時代までの大磯は、東海道の宿場として繁栄していましたが、明治維新とともに宿場の機能を失い、経済は閉塞していきまます。そうした状況を一変させたのは、明治18年（1885）の大磯海水浴場の開設でした。陸軍軍医総監を務めた医師・松

本順が転地療養として海水浴を薦めたことが始まりです。当初は旅館に長期滞在をしながら療養していましたが、より快適な日常生活を求めて自らの別荘を所有するようになります。その先駆けとなったのが、初代内閣総理大臣を務めた伊藤博文の滄浪閣でした。

また、明治20年（1887）の新橋・国府津間の鉄道開通と大磯停車場の開業も、別荘の増加に拍車をかけました。やがて、大磯町には立憲政治の確立に貢献した数多くの先人たちが居を構え、「政界の奥座敷」と呼ばれるようになります。広い敷地を持つ別荘が次々と建てられたことが、その後の大磯町の都市構造や景観にも深く関わっています。

滞在客の利用した貸家や貸間も特徴的です。明治43年の横浜貿易新報には、100軒余りの貸間の存在が記されています。別荘に出入りする商人や職人も多く、大磯町の経済活動全般に大きく関わっていたことが分かります。

このような文化が生まれた背景には、大磯が江戸時代まで宿場であったことに関係しています。宿場には、様々な人、物資、新しい情報が行き交っており、開かれた地域性と新しい物事に挑戦する気質がありました。社会の矛盾を風刺した演歌師として活躍した添田唾蟬坊を輩出し、民権結社「湘南社」が大磯に設置されて自由民権運動が芽生えたことも、こうした影響が考えられます。

明治に生まれた文化

明治期以降、大磯町では、特色ある文化が生まれ育ちました。例えば、現在の海の家は、海水浴場開設当初から設置されていた海水茶屋に由来しています。海水茶屋に所属し、海水浴客の安全管理や遊泳指導などの役割を担ったジイヤは、いわば現代の「ライフセイバー」。海水浴場を支えた陰の功労者でした。

海水浴客のために設けられた旅館・禱龍館は、病院機能を併



松本 順



伊藤博文(右)と大隈重信(左)／明治期の政界をリードした2人の貴重な写真。明治31年(1898)、大磯の滄浪閣で撮影された。

生涯学習課

☎内線323